



アジア自立支援機構代表理事

小沼 廣幸

新型コロナウイルスは、ものすごい勢いで感染拡大を繰り返し、イタリヤ、スペイン、アメリカをはじめとする欧米全体に恐怖をもたらした。アジアやアフリカの衛生状態や医療体制の悪い開発途上国にも到達している。イタリヤやスペインの惨状を見れば、インドやバングラデシュで同様の感染が広がればどれだけの死者が出るか、想像するだけで恐ろしい。

私はタイの大学で教えている関係で、ここバンコクで半ば足止めを強いられる結果になった。3月26日から4月30日までタイでは国家非常事態令が施行され、持ち帰りを除きすべてのレストランや娯楽施設が閉まり、デパートや商店は食料・生活必需品・薬品を除き閉店を強いられ、在宅

勤務や、居住地域以外への移動制限措置がしかれている。バンコクの自宅にこもりながら日本のテレビ番組やニュースを見る機会が増えたが、

もどかしさを禁じ得ないことがいくつもある。中国人全体に対する日本への入国禁止決定の遅れや、東京における感染者急増の発表。どちらも中国国家主席の訪日延期やオリピック開催の延期が決定するまで政治的に操作されたのではないか、という猜疑心(そうしん)を国内外で生んでいる。そして気になるのは、若者を中心とする新型コロナウイルスに対する警戒心の欠如だ。

イタリヤやスペイン、ニューヨークなどの惨状を見れば、多くの訪日観光客などを含めて人々が密集する東京で、爆発的感染が起こらない

気になる警戒心の欠如

「分かち合う世界へ」は、ホームページ「新潟日報モア」の「オビニオン・視点アジア」でも読むことができます。

のは、むしろ不思議なくらいなのだ。日本に限りそんな惨状にはならない、日本は違うのだ、という傲り(おごり)や無知が取り返しのつかない惨事を招く恐れがある。世界の惨状や過去の教訓を冷静に理解し、受け止めるべきだ。

以前にも紹介したが、スペイン風邪は、1年余りの短期間に全世界で推計5千万人から1億人の死者(にほんただけでも約2300万人の患者と、若者を中心とする約38万人の死者)を出した。

欧米を中心に、感染力が高くて致死率の低い第1波が1918年3月に始まり、その年の10月ごろからの第2波は、約10倍の破壊的な死亡率を伴っていた。健康な若者を中心とした死者が激増

し、翌19年の初めに起こった第3波まで続いたといわれている。

このようにウイルスは知らずに変異を繰り返して、感染力や致死力が強い性質に移行する危険性を、常に保有している。新型コロナウイルスが長期にわたり流行の波を繰り返して、いつ変異してさらなる感染力と強い致死力を持ち、将来を担う若者たちの尊い命を奪わないという保証はない。

今、一人一人がこの重大な危機を自分の問題として共有し、国益や私利私欲を捨てて人の命を最優先し、他の人への思い、小さくとも自分が身近にできる役割を確実に果たし、みんなが団結して立ち向かう社会を創れるかどうか、われわれは試されている。

こぬま・ひろゆき 1953年、東京都生まれ。明治大卒。筑波大学院博士課程前期修了。博士(農学)。元国連食糧農業機関(FAO)事務局長補兼アジ

ア太平洋局長。2017年にタイ王冠勲章を受章。18年、一般社団法人(非営利)アジア自立支援機構を設立。両親、妻は本県出身。茨城県、バンコク在住。